

麻田貞雄著

『リベラル・アーツへの道——アメリカ留学とその後』

晃洋書房二〇〇八年 二五八頁 ISBN 978-4-7710-1942-3 三〇〇〇円

川 崎 剛

本書は麻田貞雄名誉教授の「知的自叙伝」(教授自身「わく *The Education of Sadao Asada*」)である(本書 i 頁)。つまり、歴史学者麻田貞雄が形成されるに至った過程や決定的要因が記されている。ある学者・知識人の学説や学風をより深く理解するには、その人物の人生における軌跡や彼(女)が直面してきた社会的環境を知ることが有用であるのはいうまでもない。本書は麻田教授に關してそのような機会を我々に与えてくれる。

麻田教授は一九三六年生まれ。同志社中学・高校を経て、一九五四年にグルー基金第二期生としてアメリカに渡られた。ミネソタ州にあるカールトン大学で勉強され、一九五八年に卒業。その後、一九六三年にイェール大学歴史学部から博士号を取得。同年に日本に帰国され、同志社大学アメリカ研究所に研究員(助手待遇)として勤務を始めた。法学部に助教として移籍されたのが一九七二年。すぐに教授に昇進され、二〇〇六年に退職するまで数多くの後進を育てられた。麻田教授に薫陶を受けたもので現在、大学で教鞭をとるものは一〇数名に上る。さらにはかなりの数のも

麻田貞雄著『リベラル・アーツへの道——アメリカ留学とその後』

同志社法学 六〇巻五号 六〇一(二三四五)

のが海外で博士号を取得している。

麻田教授を良く知る三輪公忠氏（上智大学名誉教授）は「細谷千博博士を戦後日本における外交・軍事・国際政治史における第一世代の泰斗とするならば、麻田貞雄さんは、その第二世代の頂点に位するといえるだろう。」と教授の学問的業績を高く評価されている。⁽¹⁾ 実際、日本にいなながらも英語で世界トップレベルの議論・貢献ができる外交史学者さらに歴史学の上だけではなく、言語・文化・教養の面においてさえアメリカ人の同僚と対等にやりあえる——そして意気投合できる——日本人「国際史家」は麻田教授の他には見当たらない。

麻田教授は、一九九三年に東京大学出版会から上梓された『両大戦間の日米関係——海軍と政策決定過程』で一九九四年度吉野作造賞を受賞された後、ライフワークの集大成として二〇〇六年に *From Mahan to Pearl Harbor: The Imperial Japanese Navy and the United States* (Naval Institute Press) を、そしてその翌年には *Culture Shock and Japanese-American Relations: Historical Essays* (University of Missouri Press) を出版された。⁽²⁾ また英語論文部門においても大活躍され、一九九三年にアメリカ海軍大学 (US Naval War College) から Edward S. Miller History Prize、一九九八年にアメリカ歴史学会 (American Historical Association) から Louis Knott Koontz Memorial Award や、それぞれ受賞された。これらの業績をたたえて、母校カールトン大学は二〇〇八年の Distinguished Achievement Award を麻田教授に与えている。その後も、その筆力は衰えるどころか、ますます磨きがかかっているという活躍ぶりである。

では、このような「歴史学者麻田貞雄」が出来上がるまでに至った知的成長過程はいかなるものだったのであろうか。答えを見つければよく本書『リベラル・アーツへの道』を開かれた読者は、次のような章立になっていることに気がつかれるであろう。

謝 辞

序 章 留学の光と影

第一章 助走（一九四五―五四年）

第二章 カールトン時代 その一（一九五四―五六年）

第三章 夏の幕間―キャンブ、工場労働体験、無銭大陸旅行

第四章 カールトン時代 その二（一九五六―五八年）

第五章 イェール大学院時代（一九五八―六三年）

第六章 帰国後 同志社大学（一九六三―二〇〇六年）

おわりに

附録 グルー基金の設立―グルーと樺山愛輔

本書の大部分がアメリカ留学時代に充てられている。麻田教授はアメリカ留学時代、膨大な量にのぼる手紙をご実家に宛てられたが、ご両親はそれらを保管されておられた。今回、それらの手紙は、本書執筆に際しての貴重な第一次資料となっている。それゆえ半世紀前に起こった事柄でも、臨場感あふれる記述が見られる。これらの部分は（とりわけ一九五〇年代の）一大留学記あるいは青年時代の海外冒険記として、従来のものと比べてもたいへん興味深い。

しかし、冒頭で触れたように、我々の関心は「知的自叙伝」としての本書の性格である。この視点に立てば、重要なのは「麻田青年のアメリカ体験」そのものよりも、「麻田青年のアメリカ体験」（第二章から第五章）と「麻田青年のその後の日本体験」（第十六章）との間の緊張関係なのである。以下、この点に焦点をあてて本書を論じていこう。

〈光と影〉

麻田教授はその強烈な個性もあって、多くの人にとっては一種のバズルかもしれない。その知識人麻田貞雄——「人間麻田貞雄」といいかえても良い——というパズルを解く鍵が本書に見い出せる。

麻田教授の学者としての基盤、さらにはアイデンティティーが形成されたのは、九年間に及ぶアメリカでの大学学部（カールトン大学）・大学院（イエール大学）での知的生活のなかにおいてであった。とくにカールトン大学で受けたリベラル・アーツ教育は、「知識人麻田貞雄」の根源をなしている。それを出発点として半世紀にわたる知的成長の軌跡が本書では記されているわけであるが、日本にもどってから四〇年以上たっている今でも、そのプロセスは未だに継続中というのが麻田教授の立場である（本書ii頁）。それゆえ本書の題が「リベラル・アーツへの道」となっている。実際、本書の頁をめくると、歴史、文学、映画、宗教学、哲学、さらには心理学などからの文献が引用されており、本書はまさにリベラル・アーツを体現するものである。

このように本書は「アメリカのリベラル・アーツ教育を信奉する一知識人」としての精神史として読める。それと同時に、本書は「帰国子女第一世代」の日米文化ギャップ経験の一記録としても読めるのである。実際、日米間の文化ギャップの克服——それもアメリカ文化への同化問題（「カルチャー・ショック」ではなく、日本文化への同化問題（「逆カルチャー・ショック」）と言う帰国子女特有のもの——が本書の底流レベルでのテーマとなっている。すわなち、日本帰国後、麻田教授が歩まれた道には本書の序章にあるように「光と影」の部分があつて、「リベラル・アーツへの道」が「光の部分」であるならば「逆カルチャー・ショック克服の道」が「影の部分」をなしてきたのである。

この二つの部分からなる「日本帰国後の道」こそが、知識人麻田貞雄のアイデンティティーを形成してきた。例えば、

表面的なことではあるが、青年時代にアメリカに包まれ、アメリカに同化してしまった麻田教授の行動様式はアメリカ人のそれであり、日本人のそれとは異なることがしばしばあった。上で「強烈な個性」と記したゆえんである。最近の北米社会でアジア系の人々を「バナナ」（外観は黄色でも中身は白色）の意）と呼ぶことがあるが、麻田教授もそれになりたいへん近い——たまたま日本にいる「バナナ」であろうか。（加えて、本書に友人として登場する人物のほとんどがアメリカ人であることも象徴的である。）

この点に関しては、前述の三輪氏は次のように記されている。「(略) aggressiveness, assertiveness, competitiveness ……これらの特性を持った人物として私がすぐに思いついたのは麻田さんであった。しかし麻田さんの場合、それは、『日本人』的というよりもアメリカの学者文化の中でもひとときわ輝くという感じではないかと思う。麻田さんはややこしい主題であっても、敢えて論争に打って出るといふ点で傑出している。」³⁾

また、ちまたでは麻田教授を「日本海軍史あるいは日米海軍関係史の権威」と解するむきがあるが、これも上記の「光と影」を理解すれば表面的・一面的なことであることが明確になろう。麻田教授はせまい意味の軍事史家・外交史家ではなく、文学などもふくむアメリカ研究の専門家であり、さらには「日米関係史」という学際的な——それも日本側・アメリカ側両方の資料をこなせる——「国際史家」である。これは麻田教授が受けられたリベラル・アーツ教育を理解すれば合点がいく。しかし、それだけではない。麻田史学には、もうひとつのテーマがある。後で解説するように、教授自身が「カルチャー・ショックの外交史」と呼ばれているようなテーマである。これは教授自身の逆カルチャー・ショックという個人的体験抜きには理解できない。

〈光の部分〉

本書の第二章から第五章にわたるアメリカ留学記の部分は、それ自体、一大留学記として充分読み応えがあるのだが、ここでは二点だけに焦点を絞り解説したい。リベラル・アーツ教育という概念がまず第一。それに、麻田教授の「アメリカ初体験」の特殊性である。

【リベラル・アーツ】 リベラル・アーツは本書の鍵となる概念なので、ここでその意味を明確にしておこう。日本語でいえば「教養主義」となるかもしれないが、「教養主義」自身あいまいであるので、かえって誤解のもととなりかねない。したがって、リベラル・アーツそのものを説明する必要がある。(本書二九―三三頁に「『リベラル・アーツ』とは?」というセクションがある。)

リベラル・アーツ教育が達成目的とする基本的能力は「自分で考え抜く力」であるが、それは様々な側面をもっている。例えば、(1)知性と合理性を尊ぶ姿勢、(2)幅広い知識にもとつきながら物事の本質ともいうべきものを見抜く洞察力、(3)論理的思考力、(4)さらには知的自己成長・自己訓練できる能力である。ここで強調しなければならない点は二つある。まず、リベラル・アーツは博学主義や「バランスの取れた知識」ではなく、その本質は洞察力や思考力(論理構成力)といった「自分で考え抜く力」にある。「情報量よりも分析力」と言い換えることもできよう。もちろん、幅広い知識という「材料」がなければ思考できない。しかし、ポイントは思考にある。(ちなみに思考力強化、それも論理的思考力強化の意味も手伝って、文章を書く——論文を書く——という訓練法がリベラル・アーツ教育では重要視されている。)

「知性と合理性を尊ぶ姿勢」も「自分で考え抜く姿勢」(逆にいえば「盲目的に権威に従わない」姿勢)の一形態にすぎ

ない。

このようなリベラル・アーツ教育は、十九世紀アメリカにおける市民社会についての理想像に由来する。そのような市民社会では一人一人が「自分で考え、自分で判断できる」ことが期待されていた。いうなれば個々人は自由で独立しているのであり、そのような「自由人」(「リベラル」の部分)のもつべき知識・技能(「アーツ」の部分)こそがリベラル・アーツなのである。市民社会を前提にしてこそ健全な民主主義が運営可能となるという、このような思想はまさに啓蒙主義(人間は啓蒙できる、独立した個人となるべきという思想)の発露であり、個人の理性を尊ぶルネッサンス時代までその根源をさかのぼれよう。このような「自由人」あるいは「自由市民」を養成する高等教育機関、それがリベラル・アーツ・カレッジに他ならない(だから高等専門教育を施す大学院が⁴ついでおらず、学部四年制である)。

リベラル・アーツに関する第二のポイントは、その「動的連続性」もいうべきものであろう。知識は常に新しくなる。当然、大学教育を終えた後も、洞察力と論理思考力を運用することにより、新しい知識を吸収しながら知的自己成長を続けることが期待されている。(二〇代の人間だけで市民社会は構成されているわけではないのだから。)であるので、そのような自己成長できる能力そのものが、リベラル・アーツの一部をなしている。リベラル・アーツはまさに「一生続けて習得すべきもの、終わりが無いもの」といえよう。既に触れたように、麻田教授ご自身もこの立場をとっておられる⁵。

リベラル・アーツ教育の反対概念は職業訓練である。(現代風にいえば専門技術訓練であるが、日本では専門学校、英語圏では一般に vocational schools と言われる学校で行われる。)なるほど、職業訓練を受けた者は「手に技術」は持つかもしれない。しかし、それだけでは洞察力や論理的思考力、さらにはビジョンを打ち出す力(これらはすべて抽象化する能力を伴う)は達成できない。ましてや、文章力を蓄える訓練は受けられない。クリティカル・シンキング (critical

(thinking) の訓練も受けない。実はこれらの高等技能は、問題を見つけ、解決策を編み出し、指導力を発揮してそれを実行していかなければならない組織や社会のリーダーたちにとっては不可欠のものなのである。⁶⁾

したがって、アメリカにおけるリベラル・アーツ教育の実態はエリート教育であった(今もそうである)。それは経済的に余裕がある中流・上流階級の子弟のみが受けられたのである。麻田教授もこの点を実感されており、夏季休暇中に工場労働者として汗水流された経験が本書第三章に記されている。それはカールトン大学のキャンパスとはまさに別世界であった。加えて、一九五〇年代アメリカの文脈では、リベラル・アーツ教育は、白人むけのものであり、それはヨーロッパ文化中心主義の教育でもあったのである。本書にも記されているとおり(二〇七頁)、カールトン大学も事實上、オール白人の大学だった。また、当時のリベラル・アーツ教育はヨーロッパ文明のグレート・ブックス (great books、哲学、文学、歴史の古典) を読ませ「ヨーロッパ文明の次の担い手を養成する」という側面もあったのである。(それに関するカールトン大学でのエピソードが本書六四頁にチラリと出ている。)

その意味では、オックスフォード大学・ケンブリッジ大学を頂点とする——そしてそのすぐ下には様々な名門パブリック・スクールがある——イギリスのエリート教育システムと一脈相通するものがある。この「オックスブリッジ制度」の場合はジェントルマンを育成するものであったが、「ジェントルマンとは自主的に考えぬくことができる人間(イギリスの場合は大衆を導くことができる指導者)のこと」という理解のもとでは、ジェントルマン教育もリベラル・アーツ教育もかなり似かよっていた。また、「オックスブリッジ」制度は同質のエリート層を供出するという機能を有していたが、アメリカではリベラル・アーツ大学が他種の大学とともにエリート供出の機能を果たしていたのである。

もつというならば、リベラル・アーツ教育は一種のライフ・スタイルといえよう——それも維持費が非常に高い「エリート」のライフ・スタイルである。少人数のクラスや全寮制、整った設備(図書館はいうまでもない)、広大なキャ

ンパスなど知的生活に没頭できる好条件が全て整っているが、よっぽどの経済的基盤がない限り、大学はこれらを維持できない。実際、現在では一流リベラル・アーツ大学の授業料はアイビー・リーグの大学のそれとほぼ同じである（年間約三百五十万円、そのうえに年間約百万円の生活費が重なる——奨学金制度があるので全額支払う学生の数は少ないが）。それでも、学生が支払う額は経費の半分ほどにしかならないので、残りの経費は基金（endowment）や資産の運営、さらには卒業生からの多大なる寄付などで賄われる。やはり、恵まれた環境といわざるをえない。

以上、長々とした説明になった。しかし、本書で麻田教授がリベラル・アーツを説かれるとき、また、ご自身をいわば「リベラル・アーツ教育の申し子」のごとき議論を展開されるとき、あるいはリベラル・アーツの思想を体现するものとしてカールトン大学について解説されるとき、その前提となっているのが、これまで説明してきた意味での「リベラル・アーツ」の概念なのである。

【「古きよきアメリカ」に包まれて】 さて、有数のリベラル・アーツ大学であるカールトン大学に入学した麻田青年が直面したのは、一言でいえば「古きよきアメリカ、良心的ですがすがしいアメリカ」であった。それは公民権運動やベトナム戦争以前のアメリカ、自信に満ちた（自分の価値の健全さに疑いをもたない）アメリカ、つまり「一九五〇年代の黄金時代」のアメリカであった。何よりも、それは暖かく善意に満ちた——それと同時に個人の自由を尊重する——アメリカだったのである。

麻田青年はそのようなアメリカに文字通り「包まれた」のであった。いかなれば、麻田青年はスムーズに、それも骨の髄からアメリカ化し始めたのである。それはまさに自己同一化というにふさわしいものであった。本書には「発見、驚き、感激」の連続で、「幸福なカルチャー・ショック」とある（三五頁）。生まれたてのアヒルの雛は、始めて見た動

く物を親鳥と認識する。これを「刷り込み」現象というが、このように初めて触れたアメリカ社会のイメージが麻田青年のアメリカ観を決定づけたのであった。

麻田青年のこのアメリカ体験は、他のアメリカ体験と対比してみるとその特質がよく理解できる。彼は、太平洋戦争があつたという歴史にもかかわらず排日的態度にほとんど遭遇しなかつたという。一九五〇年代半ばは冷戦の真つ最中であり、日本は「旧敵性国」ではなく「更生されたアメリカの同盟国」として認識されていた様子である。それ以前に渡米した日本人留学生の場合とは異なり、幸運であつた（例えば本書八八頁）。また、本書では人種差別を受けなかつたと所々で記されているが、それは北中西部アメリカということもあつたと思われる。これがもしアジア人排斥（それに戦時中の日系人強制移動）の歴史を持つ西海岸であつたなら、全く違つたシナリオとなつていたはずであろう。

そのうえ、麻田青年が十八歳で渡米したという点も、彼のアイデンティティー形成過程を考える上で重要である。それは、日本人としての人格が形成されつあつたものの完全には出来上がつてはいなかつた、という微妙な年齢であつた。日本人としての自覚や自負は、麻田青年からは消えなかつたようである。（例えば、彼は英語名を自分につけなかつた。）もつと若い年齢で渡米していたなら、アメリカ化の程度はもつと深く、日本人である自覚はもつと薄くなつていただろうと言う予測は、数々の移民の例をみても間違いがない。他方、日本人としての人格形成が完成されていた後に渡米していたなら、「日本人としての意識」のため、より醒めた態度で麻田青年はアメリカ社会に対応していたか、アメリカに同化することにもつと格闘していたと思われる。

例えば、麻田青年の場合と対照的なのが江藤淳の滞米経験であろう。麻田青年と同年代ながら成人として一九六〇年代に渡米した江藤は、日本人としてアメリカ社会の基準に合わせようと躍起になつた。しかし、結局は失敗・失望し、帰国後は一種の反米思想家になつたのである——「日本人であること」が彼のアイデンティティーの拠り所となつたの

であろう。同様の精神的苦悩はイギリス留学時代の夏目漱石も経験している。これらは「水を吸うスポンジのごとく」アメリカ文化に同化していった麻田青年の場合とまったく対照的である。結局、十八歳という微妙な年齢でのアメリカ経験が、「日本人であることを捨てることなくアメリカに素直に同化する」という特殊なバランス状況を麻田青年の内にもたらしたといえよう。

このように、麻田青年のアメリカとの自己同一化は数々の（幸運な）条件が重なった結果であった。すなわち、リベラル・アーツ大学に学んだこと、そのカレッジが一九五〇年代のアメリカそれも北中西部地方のアメリカにあったこと、さらには十八歳という微妙な年齢で渡米したこと、といった諸条件である。^⑦

一九五八年、麻田青年はカールトン大学を卒業する——それも、成績優秀者の全米団体であるファイ・ベーター・クラブの会員として。この後、すぐ日本に帰っていればまた違った道を麻田教授は歩まれていたかもしれない。しかし、麻田青年は日本に一時帰国することなく、そのままアメリカに残ることを決断したのであった——それもご両親の反対があつたにもかかわらずに。アメリカ外交史の分野で大学院に進学し、大学教授への道にまい進する、それが麻田青年の決心であつた。

こうしてイエール大学大学院歴史学部で厳しい学問的修行が始まつた。（この第五章を通して当時のイエール大学の状況を垣間見ることができるので、大学関係者としては特に興味深い章かもしれない。）PhDへの道は厳しく、脱落者も少なくない。そのうえ麻田青年の場合は極貧にも耐えなければならなかつた。イエール大学からの奨学金は十分に支給されなかつたからである（その他の資金源は無かつた）。しかし、二重苦にあえぐ麻田青年にとって状況は好転していく。

特に、アメリカ外交史学会の巨匠、S・ビーマス教授に師事できたことは麻田青年にとっては決定的な意味を持っていた。ビーマス最後の弟子——それもお気に入りの弟子——として、歴史家麻田貞雄の生涯がここに始まることとなる。陰日向にビーマス教授の庇護・指導を受けたことが本章でつづられているが、麻田青年はそのような指導教官にめぐりあえて誠に幸運であった。また麻田青年もこの大家を慕った。本書の初めにビーマス教授の肖像写真が掲載されているのも領けよう。(ちなみに『両大戦間の日米関係』と *From Mahan to Pearl Harbor* 両書ともビーマス先生への霊に捧げられている。また、カールトン大学への忠誠心に劣らず、麻田教授のイエール大学への忠誠心も大変強いが、この点もビーマス教授との絆を理解すれば納得がいく。)

このようにして、麻田青年において、カールトン大学でのリベラル・アーツ教育という基礎のうえにイエール大学での歴史家専門教育が上積みされていったのである。(並行して、麻田青年のアメリカへの一層の同化が進んだ。)そして、ついに麻田青年はPhD取得を果たしたのであった——それも院生時代にアメリカ歴史学会誌 (*American Historical Review*) に論文を掲載する(一九六二年)と言う快挙とともに。これはアメリカの基準から見ても、麻田青年の実力がいかに卓越していたか物語っている。時に一九六三年(当時二十七歳)。日本を出てから九年たっていた。アメリカ史では昔も今もイエール大学は全米トップである。そこを出た麻田青年には研究者として明るい将来が待っていた——はずであった。

〈影の部分〉

ここで麻田青年は人生の岐路に立つ。日本に帰るべきか、それともアメリカに残るべきか。アメリカでは有望な助教

授職が待っていた。トップ・レベルのリサーチ・ユニバーシティでPhDを取得すれば——それも *American Historical Review* 掲載論文とビーマス先生の推薦状があれば——ほぼ自動的にそのような職が手に入る。PhD論文を学術書として出版し、研究者としてまい進できる——それも慣れ親しんだ、そして恵まれたアメリカの大学制度のなかで。

しかし、麻田青年はあえて日本に帰ることとしたのである。日本での就職先は同志社大学アメリカ研究所であった。そこに至る経過や心の葛藤は本書にくわしいが、四〇年後の現在からみれば驚くような就職プロセスとしかいいようがない。正直いって「ボタンの掛け違い」が多い、不幸なプロセスであった。

客観的にみて最も核心的な問題は、日本での職種が専任講師ではなく助手待遇（事務職）であったことと思われる。PhD所持者は研究のプロとして専任講師あるいは助教教授（アメリカでは Assistant Professor）になるのが普通である。つまり、博士課程が終われば専任の大学教員としてスタートする。これは何もアメリカ特有の現象ではなく、当時の日本の大学でも同じであった。PhD取得直後（あるいは専任教職に就職した直後）の数年は研究者としては助走期間で、研究に没頭しなければならない。ところが、麻田青年が降り立った職種は事務職であり、若手研究者としては「生殺し状況」に陥ってしまう⁸⁾。その上、研究所とは名ばかりで麻田青年が就職した当時は「助手（あるいは研究員）」一人（つまり彼自身）に事務員一人という散々たるものであった。

こういった研究環境が、一九七二年に麻田青年（当時三十六歳）が法学部に移籍するまで続くのである。実に九年。アメリカ生活と同じ長さであった。麻田教授ご自身が書かれている。「事実、一九六三年の帰国以来、私は鳴かず飛ばずであった」と（二二二頁）。法学部への移籍でもってして、やっと普通の研究環境が整った。「ようやく専門の科目を教え、自分の『帝国』を築くことができるようになり、水を得た魚のように活気づいた。」と本書にはある（二二二頁）。

【アイデンティティー・クライシス】 在米九年を経て帰国した麻田青年が直面し格闘した問題は、実はこれだけではなかった。より根源的な危機であるアイデンティティー・クライシスに麻田青年は陥ったのである。これが「影」の始まりであった。表面的には同志社大学という日本の制度との文化摩擦という形で現れたが、この危機の根はもっと深く、¹⁰⁾いわば実存的危機であったのである。

当時のこの状況を理解するには、本書から肉声を拾うほうが早い。

「日本に順応していく過程は挫折、苦悩、失意に満ちたものであった。」(一九八頁)

「アメリカでの体験を、誰でもよいからきいて欲しかった。しかし、興味を示す人は見つからなかった。(略)両親ですら私を理解しかねていた。」(二〇〇頁)

「強烈な疎外感」(二〇三頁)

「もう少しで日本の社会からドロップアウトする危ないところだった。仕事の面でも個人的にも私は『逸脱者』(deviant)であった。」(二〇八頁)

「幾度アメリカへ『帰りたい』と思ったことだろう、また何度『帰る』夢を見たことだろう。」(二一〇頁)

『帰国』したと言っても、真の『帰郷』にはならなかった。自分で新しく精神的・社会的な『故郷』をつくりださねばならず、その間、文化的にも心理的にもいわば『ホームレス』なのである。」(二二〇頁)

逆カルチャー・ショックにここまで追い詰められた麻田青年が精神崩壊しなかったのは、奇跡的ではある。実際、帰国子女の間では何等かの心理的崩壊——最悪の場合は自殺——が稀ではない。北米で多い異人種間養子縁組(白人家庭に入った有色人種の養子)においても似たような状況が報告されている。アイデンティティ・クライシスはそれほど根が深い。そして、多くの帰国子女の場合と同様、麻田青年も帰国後に所属した組織(同志社大学)と大摩擦を起こしている。(逆に、日本の組織側からみれば「異分子」に大いに手こずったこととなる。)麻田教授は当時の精神状況を次の言葉で要約されている。

「私はカールトンとイエールの九年間を通じて、『積極的に(私を)同化させようとする新しい土地アメリカに、新しい根を張っていた』のであり、今それを根こそぎにして、自己を『非アメリカ化』(アメリカがし)する意思は毛頭なかったし、いずれにせよできない相談だった。メタフォーを変えざるは、もともとエスケープの動機もあって日本から『離脱』したのであるから、祖国に再び『锚』を降ろそうにも、とっくの昔カールトン・イエール時代に、日本とつなぐ『锚』は断ち切れていた。人格形成期をアメリカで過ごしアメリカに同化してしまった私は、心理的・社会的な存在としての自分の『锚』を新しく日本社会に降ろして、自分の適所(niche)を見出すという、とてつもない困難な課題に立ち向かったのである。」(二〇四—二〇五頁、()内は原文。)

しかし、なんとか麻田教授は持ちこたえられた。徐々に日本社会・日本文化になじむ過程を歩まれたが、この「リハビリ期間」は長かった。一九七二年ごろには症状は少しは軽くなっていたように見受けられる(二二一頁)。しかし、麻田教授によれば「教師生活も地盤が固まり、日本の社会で満足すべき役割を演じているという自身が芽生え、徐々に日本の生活に同一化しはじめるようになった」のは一九八九年ごろであったという(二二六頁)。当時五十三歳。帰国してから実に二十五年かかったこととなる。

〈麻田史学の誕生と発展〉

この二十五年の間に麻田史学が培われた。そのくわしい内容や具体的な発展過程は本書に譲ることとして、ここでは「光と影」がいかに反映しているのか確認しよう。この文脈での麻田史学のエッセンスは麻田教授の次の言葉に表れている。「(吉野作造賞)『受賞の言葉』に、私はあえて『カルチャー・ショックの外交史』という題を付したが、日米の外交史、海軍戦略、文化交流、相互イメージ、人種主義など、すべてカルチャー・ショックの観点からとらえることができる」と述べた。(二三一頁、()内は評者。)

麻田教授の歴史学が学際的であり、それはリベラル・アーツ教育の結果であることは既に触れたとおりである。上の引用にもテーマの幅の広さが見られる。実際、受賞作である『両大戦間の日米関係』を開けてみれば、日本海軍の他、移民問題や日米間のイメージにも頁が割けられている。

リベラル・アーツという「光」の部分が麻田史学の横糸を構成するなら、逆カルチャー・ショックの経験という「影」の部分が縦糸を構成している。後者についても上述の引用に明らかであるが、次のようにも麻田教授は直接述べてお

られる。「私は……逆カルチャーショックをハンディキャップとしてではなく、むしろそれを味方に引き入れて、この視点から日米関係史を見直そうとするようになった。個人的なカルチャー・ショックを、より広く両国民のカルチャー・ショックの文脈のなかに位置づけることにより、その相対化、客観化をはかろうとしたのである。」(二二七―二二八頁)¹¹⁾

「カルチャー・ショックの外交史」とは言葉を変えていえば、歴史における「理念の動きや心理的要因」——それも(日米)異文化間の相互反応の歴史におけるもの——に注目する外交史である。それは当然、誤解や認識ギャップ、さらにはパラドックスや予期せざる結果といった現象に注目する外交史研究であった。これは麻田教授の英語著書のタイトルをみれば一目瞭然であろう。一冊目の *From Mahan to Pearl Harbor* というタイトルは、A・マハンの理念(いわゆる艦隊決戦主義)——それも曲解したパージョンのもの——を日本海軍が信奉したこと、それこそが日本海軍を真珠湾攻撃への道に進ませた根源的原因であるという議論を象徴的に表している。第二冊目のタイトルはズバリ、*Shock and Japanese-American Relations* である。

もちろん、このような特徴を持つ麻田史学は麻田教授個人の経験にその源を有するものの、それをめぐる学問的土壌や環境にもわわわれは注目する必要がある。本書を読んでいけば、麻田教授の大学院生時代にアメリカ外交史学会——それに恩師のビーマス教授——も心理学あるいは心理的要因を取り込んでいこうという姿勢に富んでいた様子がかがえる(一六五頁)。そのような運動に麻田教授も影響されたのではなからうか。

いずれにしても、「カルチャー・ショックの外交史」それも「カルチャー・ショックの日米関係史」を構築されたのは、麻田教授独自の功績であるのは間違いない。とくに、ついには真珠湾攻撃という極限状態まで行き着いてしまった海軍レベルでの「日米間カルチャー・ショック外交史」は麻田教授の独断場である。その過程は一九二〇年代に成立したワシントン体制から始まる、という解釈を麻田教授は採用してこられたが、その功績に基づいて教授は現在 *the worlds*

authority on Japan's role in the interwar naval treaty systems」とたたえられている。¹⁰⁾

麻田史学を特徴づける「光と影」を言い換えれば、学際性と心理的要因分析とのシナジー（融合）といえよう。そしてその具体的な分析対象は日米関係史（とりわけ海軍史であるがそれに限らない）であった。比喻を使うならば、それは山のようなものである。まずリベラル・アーツ教育によって培われた幅広い知識（学際的知識）の裾野があり、頂上に外交史のプロとしての研究がのつている。そして、その研究は、日米関係におけるそのときどきの研究対象にかかわらず、常に心理的要因の動きや影響に光をあてるというものであった。（このように見てみると、麻田教授の最近の関心である、日本の降伏決定にいたる原爆投下の精神的ショックも—それに日米両国ではまったく逆の「通説」が存在していることも—麻田史学の枠のなかにあることが理解できよう。）ただ日米関係、それも戦前の日米関係においては両国の文化間の距離があったため、そのような心理的要因は負の効果をもたらすことが多かったのである。そこに麻田教授自身の逆カルチャー・ショックの経験が投影され、教授の外交史家としての関心が集まったのではなからうか。

「光と影」を融合することによって、麻田教授は外交史家としての独自のアプローチを編み出すことに成功された。学者の研究対象やアプローチ、つまり学風は、彼（女）の人生経験に大きく影響される。麻田教授も例外ではない。一九五四年から始まった稀なる経験の数々が重なって、ついにユニークな麻田史学が出来上がったのであった。そして本書評の冒頭に触れたとおり、それは数々の栄誉に輝く、たいへん質の高い史学なのである。

〈おわりに〉

本書の最後に麻田教授は感慨深く書いておられる。「若輩一八歳でアメリカに渡り、九年間アメリカに留まったこと、

その後帰国したこと、そして同志社で四三年間教えたこと——これがはたしてすべて正しい決定であったかどうか、正直にいつて疑いの瞬間もあった。(略)(にもかかわらず)現在から振り返り、私の決定はおそらく三つとも正しかったと言える。『終わり良ければ、すべて良し』である。(二四三―二四四頁、()内は評者。)そして「光と影」はいまだに教授の中では消えていない、とも(二四四―二四五頁)。

これまで指摘してきたとおり、本書は知識人麻田貞雄を理解する貴重な「窓口」を提供してくれる。つまり、麻田青年がたどった精神史を通じて、麻田史学の成り立ちや背景を我々は学ぶことができる。戦後日本における外交史家の回顧録はそう多くなく、その意味でも本書は貴重であろう。もちろん、一九五〇年代アメリカ留学記としても読み応え十分である。(ただし、教授が勧められるヒッチ・ハイクは、現在のアメリカでは絶対に危険なのでやらないほうが良い!)
本書は、同じ学徒である読者に「自分のこれまでの人生経験と自分の学問的関心とのつながりはどのようなものなのだろうか?」という自問を迫ってくるであろう。あるいは、そのような問いに既に遭遇している読者にとっては、本書は刺激的な例を提供してくれる。それほど、過去半世紀にわたる麻田教授の体験は、日本人の外交史研究者・アメリカ研究者としては珍しいものであった。

そのような麻田教授にぜひアメリカ文明論を書いていただければと思うのはこの評者だけではなからう。リベラル・アーツ教育で培われたその膨大で幅広いアメリカ研究の知識でもって、本格的なアメリカ文明論を日本語で論じることができるのは、麻田教授の他には見当たらない。それに、アイゼンハワー時代のアメリカを実体験した日本人(文系)研究者はもうそんなに残っていないのである。「リベラル・アーツへの道」をいまだに力強く進まれる麻田教授にとって適役ではないだろうか。

麻田青年がカールトン大学を優秀な成績で卒業したのが一九五八年。ちょうど半世紀前のことである。知識人麻田貞

雄の全てがそこから始まった。今年、すなわち二〇〇八年の六月、そのカールトン大学での五〇周年記念の同窓会に参加された後、数多くのアメリカの友人宅を訪れられたと伺っている。半世紀ぶりに「里帰り」を果たされた麻田教授。その想いはいかばかりであろうか。

- (1) 三輪公忠「書評 Sadao Asada, *From Mahan to Pear Harbor: Imperial Japanese Navy and the United States*; Sadao Asada, *Culture Shock and Japanese-American Relations: Historical Essays*」『アメリカ研究』第四十二号二〇〇八年二〇〇頁。
- (2) *From Mahan to Pear Harbor* の書評は J・チャールズ・シェンキング (小出輝章訳) のものが『同志社法学』第五十九巻三号 (二〇〇七年九月) に掲載されている。
- (3) 三輪前掲論文二〇〇頁。麻田教授ご自身、『喧嘩の麻田』と悪名が高かった」と告白されている (本書二二〇頁)。
- (4) ここでいう「自由人あるいは自由市民」こそが、新島襄が「同志社大学設立の旨意」で同志社大学が養成すべきと記した「一国の良心ともいべき人々」であろう。「立憲政体を維持するは、智識あり、品行あり、自ら立ち自ら治むるの人民たらざれば能はず」という新島の言葉はまさに市民社会のことを意味する。新島の頭にあったのは彼が学んだリベラル・アーツ大学、つまりアーモスト大学であったのは想像に難くない。当時のニュー・イングランド地域のアメリカ社会が、理想とされた十九世紀的市民社会に近いと新島が考えた可能性も高い。これらの前提のもとに、日本社会における同志社大学の使命を新島は説いたのであろう。このような市民社会像の対極にあるのが、「専制下にある蒙昧の民、盲従の民」からなる社会であった。宗教的専制下、政治的専制下にかかわらず、ここでは「自由で独立した、そして社会を自分の責任でもって運営していく気概を持った市民」は存在しない——それまでの日本は新島の眼にそう映ったのかもしれない。
- (5) 国際化が進むにつれて、それまでの「国家レベルでの市民社会」に加えて「国際レベルでの市民社会」ともいべきものが徐々に生まれつつある。学生がマスターすべき知識も、他国の事情はもとより環境問題などの「脱国境の問題」へと広がっている。しかし、本文で述べた理由により、「自分で考え抜く能力」の養成というリベラル・アーツ教育の本質は変わらない。いわゆる国際化の時代においても、リベラル・アーツ教育の意義は変わらないのである。
- (6) この意味ではリベラル・アーツ教育は日本語の「教養主義」(昔の「学士教育」) に近い。また、リベラル・アーツ教育(知育)の他に徳育・体育を加えれば日本語でいう「全人教育」となる。
- (7) このアメリカ初体験が持つ「特異性」は麻田教授の二度目のアメリカ体験(一九七〇年〜一九七一年ハーバード大学客員研究員)と比較

してもよく理解できる。次のように教授は記されている。「一九五〇年代のアメリカ初体験とは異なり、冒険、興奮、新しい環境の喜びといった感覚はなかった。七年ぶりのアメリカは大きく様変わりしていた。日本の生活に適應するのに汲々としすぎたためか、今度はアメリカの生活に再適應するのに時間がかかってしまった。ミニサイズのカルチャー・ショックとでもいえようか。五〇年台の学生時代へのノスタルジアにふけるあまり、アメリカを理想化しすぎたのであろうか？ 結局、二度目のアメリカ滞在は、私のアメリカ体験にとりわけ大きなインパクトを与えなかった。」(二一八―二一九頁) 本書には書かれていないが、麻田教授はその後、在外研究でロンドン大学に滞在する機会をもたれた。この時も滞在先の文化にのめりこむことはなかった模様である。

- (8) このため新任教員には(よっぽどの事情がない限り) 行政職を負擔させないか、さしても最小限に抑えるのが、北米の大学では普通である。
- (9) 「では、どうしてこんな同志社に見切りをつけて、他のもっと居心地のよい、研究条件の優れた大学にさっさと移らなかつたのか」とした後、教授は次のように記されている。「せっかくだが自分を中心になって集めたアメリカ研究所の『日本一』の『蔵書から離れたくなかつただけである。』(二〇五頁)

- (10) 麻田教授個人の性格と同志社大学の特殊事情を離れて考えれば、これはアメリカ文化と日本文化との対立であった。すわなちアメリカの合理主義と競争・実力主義(さらには透明性と説明責任を求める態度)と日本の権威主義と人情主義(それに「和を尊ぶ精神」との対立である。このように考えれば、仮に麻田教授が他の日本の大学に勤められたとしても、よっぽどのことがない限り基本的な構図は変わらなかつた可能性が高い。

- (11) いうまでもなく、麻田史学の手法は史料を使う伝統的なものであつて、文化史やポストモダンイズムといった「反史料主義」のそれとは対極のものである。原爆投下と日本の降伏決定に関する論争における麻田教授の立論方法を見れば明確であろう。*Culture Shock and Japanese-American Relations* 所収の論文の他、日本語では本書三三三―三三四頁ならびに麻田貞雄「原爆投下」より『ノ連参戦』を日本降伏の主因を見なすとは「諸君」二〇〇六年九月号を参照せよ。

- (12) Mark R. Peattie and David C. Evans, "Japan," in John B. Hattendorf, ed., *Ubi Sumus? The State of Naval and Maritime History* (New Port, RI: Naval War College Press, 1994), p. 215.